第２回「国家の輪郭と越境」研究会
『Mother India』Part II(1927 Katherin Mayo）を読む

Mother India Part2, pp.65-141　レジュメ　　2009-05-12

担当：松尾瑞穂（京都大学 学振 PD）

＊the Grand Trunk Road：南アジア最古の道路の一つ、バングラデシュからインドを経由してパキスタンに至る 2500 キロの行程

６章「地上の神」
（王族から迎えに寄こされたロールスロイスで宮殿へ向かう場面からスタート）
エピソード①；完璧な英語を話し、西洋服を身につけたバラモンの長官、「娘に幼児婚をさせなければカースト追放にあう」
エピソード②；マハラジャの姉妹とパンジャーブの軍司令官との結婚費用→11 代にわたる 200 年以上続く藩王国ではじめて行われる娘の結婚式
→ヒンドゥーの考えでは女児は歓迎されない大きな負債、女児の誕生はお悔やみの対象
→女児殺しはギリシャ、ローマでも行われていた。植民地政府の禁止にも関わらず、現在でもインドのいたるところで秘密裏に行われている（p.70）
→女児に対する態度は、積極的な憎悪というのではなく消極的な無視。「両親は息子の面倒を見て、神が娘の面倒を見る」
エピソード③；ベンガルの病院での出来事→瀕死の娘から妻を引き離し家に連れて行く夫
→幼児婚をしたのち、女性には「地上の神」である夫への奉仕義務、明確な妻役割（*Padmapurana*の引用あり）
＊Abbe Dubois[1]：「ヒンドゥーの世帯には誠実な相互愛着や平和さえほとんどない。両性の間の差異は甚大で、女性は夫の意図や好みに従順な受動的主体でしかない」（p.74）
ヒンドゥーの婚姻は新しい世帯を持つことではなく、幼い花嫁が夫の家族という既に存在する世帯に組み込まれる。そこでは嫁は義母の奉公人として働くことが義務→「息子の母」であることは zenana のなかで尊敬の対象。依然として夫には服従しているが、人間として存在することが出来る。
エピソード④：デリーの病院での出産風景、死産が続いた母親に初めて男児が誕生したことによる母親の地位の向上

[1] Abbe Dybois はフランスの宣教師、民族誌家（1766-1848）。フランス革命の後、ポンディチェリーに布教のため渡印。著作に『Hindu manners, customs and ceremonies』(1906)などがある。

→息子も結婚した妻より母親を上位におき、愛情と恭順を示す（p.80）。

７章「罪の報い」

＊寡婦になることは前世の報いだと考えられている→幼児婚の花嫁であろうと、実際の妻であろうと同じ

寡婦は夫の家の「使用人」となる→１日１食、断食、剃髪、儀礼からの排除

＊サティが悲惨な境遇を抜け出る「聖なる方法」→イギリス政府によって禁止された（Raja Ram Mohan Roy らの支援を受けて）が、大部分のベンガル紳士たちはサティ禁止に反対。正統派ヒンドゥーは寡婦の再婚を禁止→婚姻は個人的な出来事ではなく、永遠の聖なるもの（サクラメント）。一部では処女の寡婦再婚の動きがあるが、限定的。

＊下位カーストの上昇→カースト位階は世俗的な富には全く関係ないが、地位が上昇するにつれて上の集団のまねをする。寡婦再婚の禁止が「敬意のバッチ」として見なされる以上、下位カーストもバラモンと同じように寡婦再婚の禁止を模倣していく。

＊ガンディー「少女に寡婦を強制することは残酷な犯罪である…シャーストラには根拠はない、宗教や慣習による寡婦の強制は耐えられないくびきであり、宗教を損なうもの」→だが個人的な意見であり、公共の意見ではない。

各地に出来つつある寡婦の家→インド全土には 26,834,838 人の寡婦がいるらしい（1925）

8 章「母なるインド」

＊ヒンドゥーの観念では、出産している女性は不浄な存在→不可触民が産婆（ダーイー）になる。それに加えて、子どもが死んだり、中絶・流産をしたりした女性や寡婦は邪視の怖れがあるため担うことはできない。正式なトレーニングは受けずに、家系で継承。

→全体として、半盲なうえに、病気や麻痺で手足の不自由な、最も不潔な貧しい老女に、インドの女性はその生涯で最も危険で最も傷つきやすく、最も重要な時間を委ねなければならない（p.92）

＊ダーイーがどのように助産をしているのかの記述（光の入らない薄暗い部屋で汚れた布を身にまとう妊婦、産婆は汚く爪の伸びた手を膣に入れ胎児を引っ張り出す、妊婦の腹の上を歩く（ぶどうを絞り出すみたいに）、へその緒は消毒していない割った竹やガラス、調理用ナイフなどで切る･･･）。清潔な布も熱湯もないなかでの出産。へその緒を切ったあとは良ければ何もしないか、悪ければ土壌や木炭に牛糞を混ぜたものをつけられる→丹毒で亡くなる子ども多い（p.97）。

＊①貧弱な血統、②低い栄養、③幼児婚や早期の性交渉と感染のために、多くのインド女性は身体が小さすぎたり、奇形や病気を抱えていて正常な分娩をすることが難しい。イギリスやアメリカの女医、イギリスで教育を受けたインド女性のケアを受けなければ、これらのケースは全て死んでしまうといっても過言ではない。

＊ヨーロッパの大学で教育を受けたエリートのインド人であっても、自分の妻には同じよ

うなことをさせている。掃除人であろうとバラモンであろうと、不可触民であろうと女王であろうと、生まれるときのすさまじい瞬間の彼女たちの運にそれほど違いはない（→若いマハラニの出産の様子）。
＊迷信はどの階層の間でも見られる。女性はたいてい、病気は神によると信じている。悪霊のうちで最も悪いものは、出産中に子どもが産まれる前に死んだ女性→子どもが産まれる前に女性が死にかけると、ダーイーが残された家族を保護するために予防策をとる（女性の目に軟膏と胡椒を混ぜたものを塗り、掌をくぎで床に打ち込む→魂を縛り付けて浮遊しないようにするため）（→これは信頼できる何人もの医療関係者から聞いた話）。P.104
＊インドでは年間 200 万人の胎児が死んでいる。センサスでは胎児の死亡の 40%以上は出生後 1 週間のうちに起こり、60%以上は 1 月以内に起こる。梅毒や淋病が主な原因となって死産も多い。

9 章「ヴェールの後ろで」
＊これまでヒンドゥーのことを書いてきたが、ムスリム女性についても取り上げる。ヒンドゥー女性に比べて、ムスリム女性は幼児婚と寡婦再婚の禁止という慣習がないため、比較的恵まれている→だが実際には四方を家の壁に囲まれた囚人生活
＊パルダー（女性隔離）はムスリムの支配者によってもたらされ、すぐに高位ヒンドゥーにも社会的威信を示すために取り入れられた。
＊隔離から外に出る女性は自らをヴェールで隠す（藩王国の王妃であれば窓を黒くしたロールスロイスで、ムスリムのコックの妻であれば全身を覆うヴェールで）。メイヨーがパルダーパーティに出席したときのエピソード（イギリスでの自由な生活を懐かしむ富裕層のインド女性の話、男性の声が突然聞こえてきた時のパニックなど）（p.115）
・カルカッタ大学の報告書：「正統なベンガル女性は、ヒンドゥーであろうとムスリムであろうと、幼少のころからパルダーのもとで過ごし、全人生を年長女性の管理のもとにある家での完全な隔離のもとで過ごす。この隔離はヒンドゥーよりもムスリムの間でより厳格である。限られた西洋化された女性は解放されているが、彼女たちは大部分の同胞女性から非国民的だと見なされている」
＊イギリスで教育を受けたインド男性がパルダー慣行をやめさせ、娘たちをヨーロッパの学校で学ばせているが、妻たちは人目に晒されすぎているように感じて居心地が悪い。隔離された状態をより望ましいと思っている（p.117）
＊パルダーをしている家庭では、結核による女性の死亡率がきわめて高い。カルカッタのヘルスオフィサー「女性の死亡率は男性に比べて依然として 40%以上高い」→インドの慣習はいかに疾病の普及に貢献しているか（拡大家族、狭い家で女性を押し込める、幼児婚、不品行な唾吐き、不衛生、監禁、換気の悪さ･･･）→毎年 90 万から 100 万人がインドでは結核で死亡している。
＊4000 万人のインド女性がパルダーをしていると計算される。結婚してから死ぬまで外の

世界を見ることはない女性は 1125 万人～1729 万人程度→パルダーが精神に与える影響「パルダーシステムと無知はインド女性に動物並のレベルをもたらしている。彼らは自分自身を世話することも出来なければ、意志もない。ただ男性オーナーの奴隷である」（インドの医師 N.N.Parakh の言葉）p.119

＊民族自治運動のリーダーLala Lajpat Rai による 1925 年 12 月のボンベイにおける大集会でのスピーチ；「今日のヒンドゥーの生活の大きな特徴は受動性だ。「なるがままに」は、彼らの精神、個人そして社会を総括しているものだ･･･」

10 章「未婚女性」

女子識字率：1000 人中 10 人（1911）→18 人（1921）

100 年前は、例外的なスターを除いてインドで識字女性は知られていなかった、女子教育への根強い反対（宗教社会的背景をもとにした）があることを考えると、この上昇は重要

＊英語教育を受けたヒンドゥー男性のなかには、妻にも教育を受けさせたがる者がいる→ごく少数であるうえに、息子の教育のために教育を受けた妻を求める。娘には結婚相手が決まると学校を止めてパルダーに従わせる（p.127）

＊識字率の向上は、第 1 にイギリス政府、第 2 にイギリスとアメリカのミッション、第 3 に影響を受けた進歩的なインド人によるもの。